



〔一〕 次の文章を読んで後の間に答えなさい。(字数制限がある場合、句読点・記号も一字と数える。)

毎年夏になると、朝は早く起きて近所の森に出かけていく。目当ては「虫」で、カブトムシやクワガタといった樹液に集まる虫を中心に探す。場所によってはオニヤンマなどの水辺の虫も探す。捕まえて飼うのではなくて、ただ探して、見つけて、ナガめで、そして触れる。それも暮らしている新宿区高田馬場から、それほど離れていない都心を中心に探しまわることにしている。

意外に思うかもしれないが、カブトムシやクワガタが繁殖するのにそう広い場所は必要ない。そのために、都心でもちょっとした森がある公園や大学のキャンパスなどに出かけるとこれらの虫たちを見つけることは、実のところそう難しくはない。

カブトムシもクワガタも夜行性なので、夜のほうが見つけやすいのだけれど、私は朝の日差しのなかから、少しだけ暗く、ひんやりとした森のなかに入っていくのが好きでこの時間を探しに行く。コツはひとつ。虫の眼をもつこと、いや、虫の鼻と耳……はカブトムシやクワガタにはないの<sup>(1)</sup>で、虫の知覚を擬似的にもつことだ。

ある程度森の奥に進むと、朝でも目よりも鼻や耳のほうが頼りになる。まず、樹液の酸っぱい匂いを探し、それをたどって歩く。時おり、耳を澄ませると虫たちの羽音が聞こえてくる。カブトムシやクワガタやカナブンやカミキリムシなどの甲虫類は、それほど飛びまわらない。しかし、同じ樹液に集まる蜂や蛾は違う。とくに蜂の羽音は、その樹の在り処をかなり正確に教えてくれる。音のする方向に近づいて、にぎやかな樹木を探すと、そこに虫たちの溜まり場がある。樹液の染み出た木に、虫たちがまとわりついている。蜂を刺激しないように、そつと近づいて目を凝らす。そのなかに、目当ての虫が混じっていないかを探すのだ。

虫とは、犬や猫とは異なつて意思のソツウが「できない」<sup>(イ)</sup>。虫たちは人間の意思を、ほんの少しも理解することはない。ただ、彼ら／彼女らの人間のそれとはまったく異なる感覚器で世界をとらえている。ヤーコブ・フォン・ユクスキュルは生物ごとに知覚する世界が異なることに注目した。そして生物はそれぞれの「環世界」<sup>\*</sup>を生きている、と表現した。つまり森のなかで、私たちは虫ごとの環世界をシミュレーションすることでその虫たちに近づくことができる。そしてこのとき人間は擬似的に虫の視覚を、触覚を、さまざまな知覚を手に入れることになる。そして探し出した虫たちの圧倒的に異質なその身体に触れるとき、人間は自己の

身体の一部を擬似的に変化させる。

人間と虫たちのあいだにある大きな距離が、違和感が、そして不気味さが、人間の身体に強いショックを与える。人間の身体は人間外の事物に触れること——ショッカー的な存在に出会うこと——で擬似的に変質し、その機能をより多様に発揮する。虫を探し、触れることが人間の身体を擬似的に「変身」させる。その意味において、夏休みの小学生たちは森のなかで擬似的に変身しているのだ。そして身体が変化すること、変身することではじめて宿る欲望が存在するのだ。

人間は他の人間と承認を交換することで、自己と他の誰かが「同じ」であることを確認して安心する。しかし、この安心の快楽とは異なる快楽を、人間外の事物に触れることで覚える。異種に触れることでの知覚の擬似的な拡大は、その一種にすぎない。それは、人間間の承認の交換から切り離された欲望だ。それは、そう難しい話ではない。自転車を漕ぐときに生身の足で歩くときとは異なる土地の見えかたがするように、木片を削り色を塗って小さなスプーンをつくるときに、すでに出来上がったものを用いるときには気がつかないその木の手触りや香りに敏感になるように、人間は常に人間外の事物に触れ、その結果として少しずつその身体を擬似的に変化させているのだ。情報技術に支援され、肥大した承認の交換への欲望が、この「変身」を忘却させているにすぎないのだ。

そしてこの「変身」の快楽を、人間外の異種とのコミュニケーションは強く回復させる。虫と花の高度な共進化に、蜜を得るのでもなければ、生殖の機会を得るでもないその外側にいるはずの人間がミリオウされる。その個体になんの益ももたらさないものを欲望してしまう。<sup>\*</sup>真木悠介||見田宗介はここに文化の、宗教のゲンセンを認めたがここで重要なのはむしろ、そこに他の人間から承認されることから逸脱した欲望が成立していることだ。虫に、花に触れるとき人間は、自己とはまったく異なる知覚で世界を認知している存在があることを感じ、そしてそのもうひとつの世界を想像する。そこに、知覚が擬似的に拡大する快楽を強く覚える。こうして、「変身」した人間たちの吐き出す欲望によって、相互評価のゲームに支配されたこの世界もまた、多様化していく。

対して、今日の情報社会を支配するプラットフォームには人間しか存在できない。それも、同じ規格に加工された、同じ機能を

もつアカウント⇨社会的身体しか存在できない。そこで人びとは、プラットフォームに与えられた画一的な社会的身体を用いて、同じ身体をもつ他のプレイヤーと承認を交換する以外の欲望を忘れている。問題の解決や、問いの立てなおしではなく、この問題にどう解答すると他のプレイヤーから承認されるかを基準に思考し、行動するようになる。そして、人間は事物そのものについて考えられなくなる。

そのためにもまずこのサイバースペースと実空間の双方に、人間間のコミュニケーション「ではない」ものを、承認の交換「ではない」ものを、つまり人間外の事物とのコミュニケーションを回復しなければいけない。事物とのコミュニケーションに集中したときに、人間は擬似的に「変身」する。そして、その結果として人間間の相互評価のゲームの外側にこぼれ落ちる。夏の朝の森のなかでカブトムシを探するとき、虫の眼と脚で世界に触れるとき、私たちの意識は事物そのものに限りなく集中する。そこにはプラットフォーム上の相互評価のゲームが介入する余地はほぼなくなる。言うまでもなく、それを利用した経済的、政治的な動員も機能しなくなる。このカブトムシという単語をCOVID-19に置きかえたとき、あの二年半の間人類社会がプラットフォーム上の相互評価のゲームに夢中になることで、<sup>(4)</sup>引き換えに何を<sup>(4)</sup>見失っていたかが理解できるはずだ。人間たちは、ウイルスという未知の存在と対峙<sup>たいじ</sup>することよりも、既知の人間間の相互評価のゲームに夢中になり、これはただの風邪にすぎないと述べることで怯<sup>おび</sup>える人びとを惹<sup>ひ</sup>きつけて集客と集票を試み、市民の不安を利用してそれ以前から実現を<sup>(5)</sup>目論んでいた規制を実行に移すといったことに集中してきたのだから。

この「変身」の可能性を手にするため、人間の暮らす場所は、情報技術によって画一化された人間の社会的身体のみが存在するプラットフォームから、人間外の多様な事物が存在し、それらとのコミュニケーションによって「変身」する可能性にあふれた「庭」へと移行する必要があるのだ。

これが「庭」の第一の条件——人間外の事物とコミュニケーションを取る場所であること——だ。

「庭」とは、<sup>(オ)</sup>コライ、人間が人間外の事物に触れるための場所として存在していた。古代から中世にかけての<sup>(カ)</sup>カオクにおいては、家の入り口、台所、店先などの現代でいうところの「土間」のことを「ニハ」と呼んでいた。とくに農家ではこの土間⇨ニハ

を穀物の調製<sup>\*</sup>をしたり、薬工品の製作をしたりする作業場として用いていたという。人びとは、文明が発達するなかでその事物とコミュニケーションを取る「場」を「庭」として、そのカオクや敷地内に、より私的な領域に取り入れていったのだ。

しかし、二十一世紀の現在の人類はこの「庭」のことを忘却しつつある。今日においてはかつての土間のような場所はカオクから姿を消し、「庭」もまたおおむね観賞を目的とした場所であり、何かをするための場所ではなくなっている。そもそも、都市の集合住宅に暮らす人びとはその生活の場に「庭」をもたない。私たちは社会的な分業とそれにとまなう生活の都市化を進めていくなかで、具体的に「庭」を失い、そして象徴的なレベルにおいても暮らしのなかで人間間のコミュニケーションを肥大させ、相互評価のゲームによる承認の交換の中毒になることで、「庭」を通した事物とのコミュニケーションを疎外しつつあるのだ。

これを取り戻すことは、そう容易なことではない。人間は、事物そのものに触れることよりも、事物を用いた相互評価のゲームに引き寄せられる。そのほうが速く、簡単に承認を手に入れることができるからだ。

二十一世紀の今日を生きる私たちはアルマーニのシャツの袖口からロレックスの時計をチラつかせる人間に対し前時代に取り残された愚かさを感じるが、その一方でSDGsについてのワークショップに参加して、登壇者と一緒に撮影したセルフイーをFacebookに投稿して彼／彼女にタグづけすることには夢中になっている。あるいは、そのような手のこんだ自己表現のできない人びとはその投稿のスクリーンショットをX (Twitter) にシェアして、その意識の高いセルフブランディングを僻み<sup>ひが</sup>つぽく嘲笑<sup>(6)</sup>して溜飲<sup>りゅういん</sup>を下<sup>(6)</sup>げている。まとめて深い溝に流したくなるが、これが今日の情報社会の現実だ。

つまりここでは、工業社会から情報社会への移行に応じて、モノからコトへと欲望の対象が切り替わっているにすぎない。その対象がモノであれ、コトであれ、相互評価のゲームによる承認の交換の快楽は、事物そのものに触れることで与えられる変身の快楽を容易に淘汰<sup>たうた</sup>してしまう。そして、前述したようにこのゲームの快楽は、いま、情報技術に支援され、かつてない速度で肥大しつづけているのだ。

したがって人間が人間間の相互評価のゲームとは無関係に事物にアプローチするためには、まずその場が、このゲームとは無関係に人間がそれらと遭遇できる環境が、つまりプラットフォーム<sup>(7)</sup>ではなく「庭」が必要だ。そしてその「庭」には豊かな事物が存

在し、そしてそれが絶えず変化し、そこに触れた人びとをより強く、相互評価のゲームのもたらす承認の交換の快楽よりも強く人間を誘惑する必要がある。私にとつての虫「のよなもの」が、豊かに存在している必要がある。私にとつての虫は、他の人間にもおなじように作用するとは限らない。したがってそこには、真木悠介||見田宗介が述べたように、虫を誘惑する花のような、異種を誘惑する力を得た高度な回路が、「多様に」そこに渦巻いている必要があるのだ。そしてここに、<sup>(8)</sup>第二の条件が出現する。「庭」の事物が人間を（人間間の相互評価のゲームよりも）強く惹きつけるために必要なこと。それが、人間外の事物同士がコミュニケーションを取り、豊かな生態系を構築していることだ。

（宇野常寛『庭の話』による）

注 \*ヤーコプ・フォン・ユクスキュル||ドイツの理論生物学者（一八六四〜一九四四）。

\*環世界||ある生物によって知覚される世界のこと。例えば、犬の環世界は人間には知覚できない匂いに満ちている。

\*共進化||花の進化にあわせて虫が進化するといったように、異なる種の進化が関係しあって進むこと。

\*真木悠介||日本の社会学者である見田宗介（一九三七〜二〇二二）のペンネーム。

\*サイバースペース||インターネット上に展開されている世界、空間のこと。

\*調製||乾燥させた穀物からごみなどを取り除き、出荷できる状態にすること。

\*アルマーニ||イタリアの高級服飾ブランド。

\*ロレックス||スイスを本拠地とする高級腕時計ブランド。

\*セルフブランディング||自分自身が他者から魅力的に感じられるように戦略的に振る舞うこと。

問一 傍線部（ア）～（カ）の片仮名を漢字に直しなさい。

問二 傍線部（一）の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 虫たちも感じているであろう樹液の匂いや虫たちが立てる羽音を通して、彼らの知覚する世界を感じようとする事。

ロ 鼻や耳では知覚していない虫たちの世界に少しでも近づこうとして、目を凝らして樹液の染み出た木を観察すること。

ハ 人間が目を中心に知覚している世界をもとにして、虫たちが知覚している世界をシミュレーションしようとする事。

ニ 虫たちが人間とは異なる感覚器で知覚した世界の不気味さに触れることで、自分自身の身体にショックを与える事。

問三 傍線部（二）を別の表現を使って説明した一文を、文中から二十五字以内で抜き出し、最初の五字で答えなさい。

問四 傍線部（三）の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 人間外の事物の知覚を擬似的に体験することで、自分とは違う知覚にもとづき別の世界を想像する快楽。

ロ 人間外の事物による知覚を想像することで、自分たちとそれらが「同じ」であることに安心する快楽。

ハ 人間外の事物に触れることで自分の身体が変化することが、相互評価のゲームにおいて承認される快楽。

ニ 人間外の事物とのコミュニケーションにより回復される、自分たちとそれらが互いに惹かれあう快楽。

問五 傍線部（四）とあるが、筆者は何が見失われたと考えているか。具体的に述べている箇所を、文中から十五字以上二十字以

内で抜き出しなさい。

問六 傍線部(5)について、以下の間に答えなさい。

(i) 漢字の読みを平仮名で書きなさい。

(ii) どのような意味か。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ たくらんでいた

ロ あきらめていた

ハ もたらしていた

ニ うながしていた

問七 傍線部(6)とあるが、どのような意味か。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 相手のことを見下している

ロ もやもやした気持ちになる

ハ むなしさでいっぱいになる

ニ 気分をすっきりさせている

問八 傍線部(7)とあるが、筆者はなぜ「庭」が必要だと考えているのか。プラットフォームとの違いに着目して、六十字以上

七十字以内で述べなさい。

問九 傍線部(8)とあるが、具体的にはどのようなものか。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 人間ではなく花や虫などの人間外の事物を強く誘惑するような多様な力が働いている必要があるということ。

ロ 人間外の多様な事物が織りなしている豊かな生態系が人間を誘惑するほどの力を持つ必要があるということ。

ハ 人間が人間外の事物とのコミュニケーションを通じて変身する可能性にあふれている必要があるということ。

ニ 人間外の事物をコミュニケーションによる相互承認のゲームの快楽に強く惹きつける必要があるということ。

問十 本文の内容に合致するものを次の中から二つを選び、記号をマークしなさい。

イ 筆者は、夏の朝に甲虫の羽音に耳を澄まして彼らが集まっている樹液の位置を特定し、そこで見つけた虫たちと心を通わせるのを楽しみにしている。

ロ 人間外の事物に触れることで覚える変身の快楽よりもプラットフォーム上の承認の交換で得られる快楽の方に、現代の人は強く惹きつけられる。

ハ 今日の情報社会ではプラットフォーム上に人間と人間外の事物をめぐって埋めがたい対立があり、そうした問題はまとめて深い溝に流すべきである。

ニ 二十一世紀を生きる私たちからは人間外の事物とのコミュニケーションが失われているので、それをプラットフォーム上に回復しなければならぬ。

ホ 集合住宅のような実体的な場からもサイバースペースのような仮想的な場からも失われてしまった「庭」を回復する必要性を、筆者は主張している。

ヘ COVID-19が猛威をふるっている間、人類は情報技術に支えられた相互承認のゲームを通じてウイルスの引き起こす問題に常に対峙し続けてきた。

〔二〕 次の文章を読んで後の間に答えなさい。(字数制限がある場合、句読点・記号も一字と数える。)

\* マルセル・モースが、\* マオリ族の習俗のなかで観察したり分析した、贈与の儀礼が指示しているのは、商品交換とはまったく別の社会全体のモラルの在り方です。何かを贈与された場合、受け取りを拒否することはできず、受け取ったら必ず、第三者に再贈与しなくてはならない。そうせずに保持して溜め込んでいけば、災厄に見舞われ、場合によっては死んでしまうこともある。

あらゆる贈与物(タオンガ)には、贈与霊としてのハウが付いており、贈与されたもの自体に意味があるのではなく、このハウが人々のあいだを行き来することで、社会全体に秩序や調和が生まれるということと、話のポイントがあるように思えます。

受けた贈与を第三者にパスするということがポイントなんです。そうすることで、共同体を維持持続してゆくための全体給付のモラルが実現するということです。

だからこそ、受け取りを拒否することはできないのです。受け取ることは義務である。

ここところは、現代の等価交換のモラルとはまったく違うところです。

現代の私たちが生きる社会に目を向けてみましょう。産業そのものだって、自然の贈与みたいなものが最初になければ、成り立たない。古代社会のように、その自然の贈与の範囲の中で生活をやり繰りしているのであれば、問題にはならなかったことが、現代社会においては様々な問題を引き起こすようになりました。とりわけ、自然そのものを破壊してしまうようなことが起き始めています。開発過剰による環境破壊や、公害といった問題です。そうした目に見える問題だけではなく、モラルや経済システム、社会システムも変調をきたすようになっていっているように思えます。

人間というのは、必要以上に自然から収奪し、貯蔵し、他の商品との交換材として利用することで、商売にしたわけです。マオリの贈与の霊からすれば、現代人、資本主義的なビジネスマンたちはとんでもないことをしているわけです。

マオリの情報提供者に言わせれば「そんなことしていると死んじゃうよ」ということですよね。



ところで、グレーバーの『負債論』の中で面白かったのが、どんな社会でも、共同体の中を貫いている原理というのはコミュニケーションなんだと言っているところです。ゴールドマン・サックスの中にも、コミュニケーションがあるんだと。

どんな強権的なヒエラルキー社会の中にあっても、日常行動の基本にあるのはコミュニケーションであると。

どういうことかという、たとえば職場で、「ちょっとそのボールペン貸して」って言うでしょ。「貸すけど、見返りは？」なんて言いませんよね。「コピーしてくれない」とか、「お茶いれて」とか。食卓では「そこのお醤油とって」と普通に言いますよね。しかし「とってあげるけど、高いよ」なんて言わないじゃない。

メンバーの誰かが困っていれば、話を聞いてあげる。

親や兄弟にご不幸があれば、<sup>(ア)</sup>コウデンを包んでお葬式に出席する。

それは、一見、弱肉強食の原理でシノギを削っているかのようなヤクザの社会でもおんなじだと。

どんな極悪非道なやつでも車に轢かれそうな猫がいると思わず助けてしまうことがあるわけじゃない。<sup>(a)</sup>基本的には<sup>(イ)</sup>相身互いという助け合うということがあって、それが社会の中に組み込まれているからうまく回るわけです。

それは人間がひとりでは生きられないということの裏返しなんです。だから、人間は共同体をつくる。共同体の内部においては、それがどんなに、強権的、抑圧的なものであっても、相互扶助的な原理が働いています。それがなければ、共同体というもの、そもそも秩序を保っていけないし、平和に運営してゆくことができずに、やがては崩壊してしまいます。

現在の社会というのは、ある意味で、<sup>(1)</sup>まったく世知辛く、<sup>(ウ)</sup>損得勘定ばかりがハバを利かせているわけですけど、まがりなりにも秩序が保たれているのは、そこに、相互扶助的な原理が働いているからだと思えます。

アメリカの会社では、入社契約時に、ジョブ・デスクリプション（職務定義）を渡されて、そこに書かれていない「コピーとり」や「お茶くみ」はしないということが言われていましたけど、わたしの経験では、そうとばかりは言えないと感じましたよ。小さな相互扶助は普通に行われていましたから。

批判するにせよ、擁護するにせよ、金銭合理主義や、等価交換、自己責任の世界ばかりが、あまりに強調され過ぎているように

思えます。

まだまだ、相互扶助は健在なのです。

まあ、それでも、とても小さくて、ささやかな相互扶助しか、生き残っていない時代になっていますけどね。

そして(2)小さなコミュニティは、現代の超資本主義の時代においてもあちらこちらに生き残っている。

小さな相互扶助は、ほとんど無意識で行われている。

そういうわけで、(3)皆が「自己責任」だとか言い出したら、その社会はもはや共同体としては、崩壊しているということだと思っ  
 のです。だから、九〇年代以後、盛んに「自己責任」とか言われ始めたとき、わたしは、社会全体が壊れ始めているんだと感じた  
 んだろうと思います。社会全体が崩れるというのは、社会の秩序を支えているモラルが崩壊し始めているということなんです。

ここで言うモラルというのは、盗んではいけないとか、不倫はひとの道に反するとか、そういう倫理的な善悪とか、法的な規範  
 のことではありませんよ。

もっと、原初的な、人間が生き延びていくための、共同的な生存規範のような意味で言っているのです。

そして、この原初的なモラルのほころびが社会のどこに出てくるかというところ、唐突なようですが、言葉遣いの中に、まず出てく  
 るんだろうと思います。本来的には、言葉は他者との共生を前提にして交換されるものです。言葉に対する相互の信頼があつて初  
 めて、人間同士の交通が可能になります。

その意味では言葉は貨幣に似ているのですが、決定的に違うのは、貨幣は商品交換のための道具であるのに対して、言葉は、も  
 ととは贈与のための道具だったということです。

母親は、赤ん坊が言葉を理解する前から、一方的な贈与として言葉を投げかけます。

子守唄を唄って子どもを寝かしつけます。危険なことをすれば、声をあげてシカリつけます(E)（この時点で子どもは、まだその意  
 味を理解していません）。

そして、赤ん坊が初めて言葉を発するとき、その言葉とは、母親が子どもに贈与した表現手段であり、表現方法と同じものに

なっている。

母親は、自分のことを「ママはね……」と言って子どもに語りかける。自分のことだから、「わたしはね……」と言うべきところを、子どもの目線から、子どもに語りかける。それが、言葉による子どもへの、言語習得の贈与でなくて何なのでしよう。

貨幣と言葉の違いは、ほかにもあります。貨幣は、それが偽札でない限りは、それが流通している地域においては、誰に対しても同じ価値基準を表現します。同じ交換価値として機能しています。

一方、言葉はそれが嘘であるか、本当であるか、傍<sup>た</sup>からは、見分けが付きません。

相互に信頼し、相互に扶助し合う共同体の内部においてのみ力を発揮するものであり、異なった共同体や異人種とのあいだでは、言葉はときに敵対のための道具になってしまうことがあるのだらうと思いますね。

外国人が隣にいるときに、言葉が通じないと思って、悪口言っちゃうことって、あるじゃないですか。

「A」とは、まさに、ひとつの共同体の内部が、分断され、敵と味方に分別されたときに発声される敵対的な言葉なのです。

社会の分断がこのような言葉を生み、言葉がさらに社会を分断してゆく光景をわたしたちは目の当たりにしているように思えるのです。



贈与的な社会について考えるうえで、ここで、反対概念としての市場経済というものを考えてみましょう。

市場経済について考えるというのは、お金について考えるということと同じです。お金の縁（オ）いわたしが、お金について考えるというのも皮肉な話なんですけど。やはり、どこかに、お金に対する愛憎（オ）のようなものがあるんでしょうね。どこかで、一度決着をつけなくてはと思うのです。誰でもそうでしょうけどね。

そりゃ、お金は欲しいです。現代において、お金の力というものは、他の何物よりも大きなものですからね。

でも、わたしは、お金が欲しい最大の理由は、お金の現実的効用ではないと思っています。お金持ちであるというシンボリック

な意味のほうが大きいんじゃないのかな。それこそ、その日暮らしのひとにとっては、お金は生きるための効用そのものですが、すでに大金を持っているのに、お金を欲しがらる人々がいる。威信とか、名誉とか、ステイタスとか、そういうシンボリックなものも、お金で買うことができる。買うことができるというよりは、お金そのものが威信であり、名誉であり、ステイタスの象徴なのです。だから、支払いなしで、それらのものを手にすることができる。

結果として、お金には万能の力が宿っていると信じられることになる。だから、誰もがお金を得たいと考える。有り余るお金があるのにもっと欲しいと思う。このお金への信仰がなくなった瞬間に、お金の交換価値としての機能も失われます。

ところで、お金を得ることによって、何かを失うこともまた真実らしいのです。その反対に、お金を失って得るものもあるかもしれません。

とにかく、お金については、考えることがたくさんあり過ぎて、どこから語り始めたらいいのかわからないほどです。

いろいろ考えて、これまでの文脈で言うならば、お金というのは、いったい何のために考案されたのかということから始めたいと思います。お金の無い時代というものは、あったし、現在でも部族社会には残っています。

では、そういう社会の人々の暮らしをつないでいたものは何かといえ、それは、これまでも考察してきましたが、端的に言えば一人ひとりの負債関係だったということですね。こちらは、信仰ではなくて、信用ですかね。

足りないものを仲間からもらったり、あるいは仲間で分け合ったりするのは、共同体の仲間への信用があるからだろうと思います。

一人では生きられない<sup>(c)</sup>ということは、ひとは誰も、他なるものに何かを負って生きているということです。贈与と返礼という交換関係もまた、それが等価交換でない限り、どちらかが負債を負った状態のまま、贈与返礼を繰り返しているということになります。このポトラッチと言われる習慣は、今でも普通に残っていますよ。

たとえば、お見舞金やお祝い金に対して、Bという習慣がありますね。つまり、これは負債を一方の側に残したまま関係を続けるということをお互いが暗黙の裡<sup>(カ)</sup>に了解しているということです。だから、関係を続けていくためには、返礼は等価で

はいけないのです。より多くか、より少なく返礼をする。だから、この贈与返礼の相對關係は繼續してゆくわけです。

こうしたことから、等価交換の道具であるお金とは、結局何だったのが示唆されます。つまり、お金とは、關係を断ち切るための道具として登場したということなのです。

まえに、お金とは、交換の速度を上げるための道具だと言いましたよね。

それと同時に、關係を断ち切るための道具でもあるのです。

お金 Ⅱ

- ・ 交換を **C** する道具
- ・ 關係を断ち切る道具

この二つの、一見何の關係もないようなことがらのなかにこそ、お金の秘密が隠されています。

交換を **C** するためには、關係を絶えず断ち切る必要があったのです。關係を断ち切られても生きていけるようにするためには、お金が必要だったのです。

お金を払うことによって、負債關係が断ち切られる。負いつ負われるという關係の無限連鎖を終了させるためには、等価物を返さなくてはならない。等価物を返すことで、相對の關係が終了する。じゃあ終了しない關係(d)というのは何かというと、その

**D** です。お金が介在しない贈与關係なんですよ。

贈与關係 Ⅱ

- ・ 交換を禁止すること
- ・ 關係を **E** させること

ちょうど、貨幣經濟と **D** のことが、贈与的な經濟を支えているのです。

交換を禁止なんてしていないじゃないか、と言わないでください。マオリの報告者は、返礼を贈与者に直接返してはならないと言いましたよね。やはり、相対的な交換を禁止しているのです。

これで、かなり、貨幣経済と贈与経済の違いが整理されました。

(平川克美『21世紀の楢岡幻想論』による)

注 \* マルセル・モース『フランスの社会学者、文化人類学者(一八七二～一九五〇)』。

\* マオリ族『ニュージーランドの先住民族であり、約千年前にポリネシアから移住してきたと言われる。』

\* グレーバー『デヴィッド・グレーバー。アメリカの人類学者(一九六一～二〇二〇)』。

\* ゴールドマン・サククス『米国に本拠を置く世界有数の金融機関。投資銀行業務、証券業務、資産運用業務などを展開しており、企業や個人向けに多様なサービスを提供している。』

問一 傍線部(ア)(ウ)(エ)の片仮名を漢字に直しなさい。

問二 傍線部(イ)(オ)(カ)の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

問三 傍線部(a)～(d)には用法の異なるものが一つある。これを選び、記号をマークしなさい。

問四 文脈から判断して、傍線部(1)の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 便利なわりに、暮らしにくい。

ロ お互いに監視が厳しく自由がない。

ハ 計算高くて心にゆとりがない。

ニ 人々の心変わりが激しい。

問五 傍線部(2)とあるが、本文全体の趣旨を考えて、筆者はこれをどのような意味合いで用いているか。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 革命によって権力を獲得した労働者階級の人たちが理想とし実現を目指す、階級対立のない共同社会のこと。

ロ 相手の気持ちに寄り添い、互いに共感し合うことで関係を保つというコミュニケーションにおける構えのこと。

ハ 優劣を競い合うことに代わって助け合いの姿勢に価値を見出そうとする、資本主義社会に生じた新たな運動のこと。

ニ 誰かの役に立ちたい、困っている人に手を差し伸べたいという、人として自然に備わっている心持ちのこと。

問六 著者が傍線部(3)のように述べるのはどうしてか。解答欄に合うように、四十字以上四十五字以内で答えなさい。ただし、「人間」と「社会」という語を必ず用いること。

問七 空欄Aに入るべき語は何か。文中から四字で抜き出して答えなさい。

問八 空欄Bに入るべき語は何か。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 意趣返し   ロ 気持ち返し   ハ 袖返し   ニ 半返し

問九 空欄Cに入るべき語は何か。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 促進   ロ 強要   ハ 観察   ニ 拡張

問十 傍線部(4)とあるが、こうした関係にある人々はどのようなやりとりを行うことになるか。この問いの答えとして最も適当な一文を二十字以内で抜き出して、最初の五字で答えなさい。

問十一 空欄Dに入るべき語は何か。漢字二字で答えなさい。

問十二 空欄Eに入るべき語は何か。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 停止   ロ 更新   ハ 確認   ニ 継続

問十三 本文の内容に合致するものを次の中から二つ選び、記号をマークしなさい。

イ 古代社会の経済では貨幣が用いられておらず、この点に着目すれば、古代社会の経済と現在の部族社会の経済との比較考察はとても興味深いものとなる。

ロ きわめて高度に発達した今の資本主義社会の中にも Kommunismus は認められ、それは普段は観察されないが、非常時になると人々の行動指針として現れてくる。

ハ アメリカ社会では、契約時の職務定義に書かれていない「コピーとり」や「お茶くみ」を拒むことができるが、そうした社会に対し、本文の筆者は危機感を覚えている。

ニ 「そこのお醤油とって」と言われて醤油をとってあげるのも、極悪非道な人が車に轢かれそうな猫を助けるのも、資本主義社会において観察される相互扶助である。

ホ 母親は見返りも求めず、あたたかい眼差しの視線をもって赤ん坊に一方的に語りかける。それゆえ、言葉は贈与のための道具であるのだと考えられる。

ヘ 代金を支払って商品を買ったサービスを受けることに比して、私たちにあって、小さな相互扶助はほとんど無意識に行われるきわめて自然な行為である。

ト お金に万能の力が宿っていると思う信仰心からお金が欲しくなるのであり、お金の現実的効用の観点からはお金が欲しくなることを説明することができない。